慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ルイ十六世の脱走事件顛末
Sub Title	
Author	占部, 百太郎(Urabe, Hyakutaro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.4 (1931. 12) ,p.1(555)- 22(576)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19311200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史學　第十卷　第四號　昭和六年十一月

ルイ十六世の脱走事件顚末

ルイ十六世の『ヴァレンヌ逃亡』の事はフランス革命と云ふ大悲劇の一齣に過ぎないやうに見ゆるけれど、その事自身が演劇的興味に富むと同時に、この革命に一大轉機を與へた非常に歷史上の重大なる事件である。若し當時ルイが、最初から逃亡を企てないか、又は巧みに逃亡の目的を遂げたとしたならば、フランスの歷史、延いては世界の歷史は餘程異つたものとなつてゐたことであらう。少く見積つてもこの脱走失敗に因つて、結局フランスに於けるブルボン王朝の顚覆を招いたのである。その次第はパリの一部過激革命派の間に於てすら、共和政治と云ふことを口外するやうになつて來たのは、實にルイがヴァレンヌから首府に連れ歸られた以後の事であつたからである。パリ市民否フランス全國民が國王

脫走の報に接し、その國家の元首を失つた悲痛、失望、落膽の爲、周章狼狽した光景は實に餘所の見る目も痛ましい程であつた。それ程フランスの人の大多數は眞心に於て王政主義者であつたのである。

（一）

ルイ十六世が逃亡を企つるに至つたのは、ヴェルサイユからパリに王宮を移した以後の事である。併し未だ好い機會を得るに至らなかつたが、一七九〇年八月四日ルイは國民議會に迫られて、遂に『教會管理法』(Civil Constitution of the Clergy) を裁可すべく餘儀なくせられた。之が逃亡の最大動機であつたのだ。元來 Most Christian King の稱號あるフランス國王の中でも、ルイ十六世は最も宗教心の熾んな人であるのに、彼が尊崇してゐたローマ法王の權威を全然度外視し、僧正以下の僧職をばローマ教徒の異端外道視した新教徒や、ユダヤ教徒や、甚だしきは無宗教者をも包含したる一般人民の公選に依つて薦擧すると云ふこの『教會管理法』の規定には、何としても彼の良心が承服しなかつた。彼はこれが爲自己の靈魂が救はれないだらうと危惧しつつ、忌や〳〵ながら玉璽を捺したのだ。革命の大立者であつたが、結局人民の輿望を裏切つて國王の秘密顧問になつたミラボウ伯はルイに向つて、秘密に逃亡しないで、ルーアンか其他パリ暴民の脅迫を受けない安全なるフランス國內の或る場處に公然堂々と、國民議會と共に遷都すべきことを勸告したけれど、ルイ十六世は躊躇して決心する事が出來なかつた。

ところが、翌一七九一年に入つて、愈〻王をして逃亡の念を切ならしむる事が差迫つて來た。若しルイ十六世がパリに居れば、前年彼が裁可した『教會管理法』によつて、フランスのカトリック教會は分離を來しつつあつた際だから、必然Easter祭には禮拜式の事で騷動が持ち上がるに相違ないと憂慮してパリの郊外なるサン・クルーでイースターの禮拜を行ふことに決心した。そこで、彼は王后マリイ・アントアネットその他の王族と共に同地へ行幸せんとするところを、果してパリの暴民はチュイレリイの宮門に擁して王駕の進行を妨害し、中には不敬の言を放つ者もあつて、とう〳〵行幸は中止せざるを得なかつた。果然ルイ十六世一家が囚徒同樣の境涯に居ることは、事實が明々地に證明したのである。

サン・クルー行幸の失敗は、ルイ十六世をして一層逃亡の念を切ならしめたのだが、他に今一つブルボン王室のパリに留まり難い事情が出來した。王妃マリイ・アントアネットはオーストリヤのレオポルド二世（神聖ローマ皇帝）と兄妹の間柄であるけれど、レオポルドが肉身だからとて、必ずしもその妹夫婦をかかる苦境から救ひ出し難い事情があつた。と言ふのは、この兄妹は骨肉ではあつても、約二十年間一度も顏を合はせなかつたのみならず、相互に氣心を知合つてゐる仲ではなかつた。その上にレオポルド二世は非常に冷靜の質で、輕卒に事を發せない人であつたのみならず、當時オーストリヤの内政外交は、單に帝室の血族關係と云ふだけで、兵を動かし難い狀態であつた。併もレオポルドは有名なる啓蒙君主ヨセフ二世の後繼者であつた程だから、内心はフランス革命の或事業には贊成してゐたのみな

らず、フランスが革命の爲に疲弊することは、內心却て喜ぶ風もあつたのである。何れにせよ、レオポルドはルイ十六世夫妻が逃亡の目的を容易に達し得ないと信じてゐたのだが、結局その目的を達するまで、何等具體的の約束を王后に與へんとしなかつたのである。併しマリイ・アントアネットは王室が今この屈辱を受けつつあるを見ては、如何に冷靜——冷酷なほどに見ゆる兄帝と雖、遂に心を動かさない譯には行くまいと推察して、ヂュフォル伯を密使として、當時イタリヤのマントヴァに在つたレオポルドの許へ援助を乞ふ可く遣はしたところが、この人選は宜しきを得てゐなかつた。レオポルドはその時フランス亡命貴族の首領アートア伯（後の佛國王シャルル十世）と何か協議中であつたが、ヂュフォルはアートア伯の黑幕なるカロンヌ（革命勃發前の大藏大臣）の爲、巧みに誤魔化されて了つた。彼が皇帝の親書なりとて王后の許へ持歸つた二十一節から成る返書に依れば、レオポルドはその年の夏季十萬の大軍を以てフランスに侵入すると云ふ事で、皇帝は亡命貴族等の政策に贊成してゐるとの趣意であつた。この文面の如く、いよいよオーストリヤの大軍が、フランスに侵入する事になれば、豫ねてフランス人の間に不評判で、オーストリヤとの內通を疑はれた王后は激狂せるフランス人の爲に殺害せらるゝであらう。國王その他王族の身上にも危害が及ぶであらう。元來過激で亂暴で、後年ホワイト・テロルまで演じた亡命貴族等は、彼等が目的とする ancien régime の復古の爲には、外兵を誘致する事さへ辭せぬのだから、これが爲、國王王后の生命を犧牲とする事をもしかねないのである。國王も王后も

亡命貴族の狂暴をば、寧ろジャコベンの運動以上に嫌惡してゐたのであるから、今や一刻も猶豫はならずと、いよいよ逃亡の念を固めた次第である。これがヴァレンヌ逃亡の最近の動機であつたのである。ところが、デュフォル伯がレオポルド帝の親書なりとて持歸つたのは、その實カロンヌの僞書であつて、爾來一百年間歷史を支配し來つたのであるが、一八九四年に至つて、漸くレオポルド帝の眞正の返書が世間に發表せられて、はじめて、事の眞相が闡明せられたのである。

（二）

ヴァレンヌ逃亡の計畫には、色々の人物が王宮の內外に於て、秘密の裡に參畫してゐたのだが、その首謀者は外に於てはブーエー侯であり、內に於てはフェルサンであつた。當時スウィスに退隱してゐた王黨の領袖の一人ブレトゥイも亦陰謀に與つたのであつた。ルイ十六世はミラボウよりも寧ろこの人を信用して大に用ゐる積りであつたらしいが、この人はアートア伯及びカロンヌ等と自ら態度を異にしてゐたにも拘らず、矢張り ancien regime の復古論者であつたので、ルイ及び王后とは究極の目的を多少異にしてゐたのである。併しブレトゥイもミラボウも均しくブーエーを國王に推薦した一人である。

ブーエー侯は西印度でイギリス軍に捷ちて武名を耀かし、輓近にはナンシイ軍隊の革命的暴動を手强く鎭壓したので、彼の勇名は一層高くなつた。當時フランスの常備軍は到る處革命熱に浮かされて、紀

律案れ、離叛者踵を接したのだが、唯だブーエーが司令長官であつたメッツ管區の軍隊のみは、聊か信賴するに足るとの世評であつた。併しブーエーはフランスの軍隊に望を絶ちて、ロシヤに招聘せられんとしてゐたのだが、恰も國王の密使とプレトゥイの依賴書に接したので、忽ち野心を起すに至つたのである。次にフェルサンはスウェデンの軍人で、パリの宮廷に招聘せられ、ルイ十六世の逃亡計畫の一切、逃亡の道順、馬車の傭入れ、時間の打合せ、服裝の事等、全く彼の方針に出でたのであつた。

ミラボウは一七九一年四月二日に死んだが、その死前に方つて、友人ラマークを密使に立て、ブーエーを說いて、公然武力を用ひてパリに侵入し、以て王室を救出せむことを慫慂したけれど、ブーエーはこれを用ひず、結局フェルサンの主張したやうに、秘密脫走の事に決定したのである。然らば、ルイ十六世がブーエー侯を信賴し、モンメディに向つて逃亡を企てた目的如何と云ふに、ルイの考では、革命黨は既に分裂して、過激、溫和の二派を生じ、國民議會に對する處置を過つて、甚だしく國民の間に不評判を買つてゐるから、未だ內心尊王心篤きフランス人は一度國王を失はんか、如何にラファイエットの威名を以てしても、人心の動搖を鎭撫する能はず、到底彼はディクテーターたるを得ないであらう。其の處に乘じ、ブーエーの武力を藉りてフランスに臨んだならば、結局內亂を鎭壓し、國民議會を解散して、ルイの豫め希望したやうに、憲法の修正を遂ぐることは掌を反すが如きであらう。ルイは固よりブーエーの軍隊の背後にはオーストリヤ大軍の援助あるが如く擬勢を示し、以てフランス人を威嚇せん

と求めたけれど、形勢の如何に依りては、或はオーストリヤ軍の助力を藉らず、コンデ公アートア伯等亡命貴族の軍隊にも賴らず、單にブーエーの軍隊のみを以てパリに凱旋することが出來ると忘想してゐたのである。然も、これは盾の半面を見た考で、國王の信賴してゐたブーエーの軍隊にも亦革命思想波及して、兵士は豫期の如く忠順ならず、一方に於て、フランス人はルイ十六世逃亡したと聞いたらば、國王は必然オーストリヤ軍及び亡命貴族軍の武力に擁せられて、フランスに取つて歸し、フランス人が革命に依つて折角に獲得したる自由と權利とを忽ち剝奪せらる可きを恐れて、國を擧げて國王に反抗す可きことを察知しなかつたのである。

かくて、パリのフェルサンとメッツのブーエーとの間に數回密使の打合せが濟んで、ルイ十六世及びその一家はいよいよその年の六月二十日の夕にパリから逃亡する事と決定せられた。先づ逃亡の用に充てる乘物であるが、最初輕い馬車二臺を傭ふ計畫であつたが、王后の反對で馬鹿に大きい馬車一臺に一行が同乘することになつた。これが後に沿道人民の疑念を誘ふ原因となつた。又ブーエーは氣力に富み機才ある將校の同伴を希望し來つたのだが、王后は他人の同乘を好まなかつたので、これも沙汰止みとなつた。併かも王后は體力の强い餘り發明でない士官をば三人、從僕として前後を警衛せしむることにした。これが亦事の發顯を來す原因であつた。首謀者フェルサンの計畫は實に綿密であつたけれど、唯だ一個の失敗と云ふのは、王子女の供人を一行より先きに馬車で送つたのであるが、その御者の口から

端なく一行行先の方向が漏れたのである。パリでフェルサンと謀し合せて、國王一行の逃亡を幇助したのは、ロシヤの貴婦人コルフ夫人である。一行の旅行券と一萬二千磅の旅費とを調達したのも此のロシヤ貴婦人であつた。コルフ夫人はロシヤに歸朝すると云ふので、最初旅行券をその筋から獲たのであるが過失で燒いたとの口實で、パリ市長バイイーに再下渡を乞ふたけれど、聽許せられなかつた。そこで外務大臣モンモランに願つて漸く下渡せられた。而して番號は前のと同一で、唯だ行先がフランクフルトに變つた。これが又後日失敗の一原因となつた。

（三）

此の如く逃亡の準備萬端整つた。約束の六月二十日は到來した。あの賑かなパリの夜も漸く人影の疎らなる頃、素晴らしく大きな馬車が、チュイレリイ王宮とセイン河とを隔てた向側唯ある街頭に待ち受けてゐた。御者臺の側に腰掛けて、御者と耳語してゐるのは、實に首謀者フェルサンその人であつた。時刻は追々迫つて十二時になつた。コルフ夫人の從僕に扮した國王ルイ十六世を始め、未だ幼なき王太子と王女、王妹エリザベス、王子女の保姆ツウルチェル夫人何れもチュイレリイ宮の側門を忍び出でて、件の馬車に乘込んだ。最も後れて到着したのはコルフ夫人に打扮つた王后マリイ・アントアネットであつた。斯くて一行は幸先よしと、內心夫れ〴〵將來の幸運を夢みつゝ、大なる馬車は轆轤と途を東南に採

りて、暗の中に沒して了つた。王弟プロヴァンス伯（後のルイ十八世）は該夜國王と最後の晩餐を與にしたが、伯は伯爵婦人と一緒に、國王の一行とは別路を採つて同じ夜パリを脱出し、無事ブルッセルに到着したが、これが兄弟の永き別れとなつたのである。

是れより先、國王の伯叔母はイタリヤに亡命し、その他貴族高官の逃亡頻々たるので、パリの人心は恟々たる有樣であつた。ところが、國王王后亦逃亡すべしとの風說は、パリ人の間のみならず、フランス各地殊にその東北部地方には、逃亡の數日前からうす〳〵傳へられた。パリ市長バイイーは國王逃亡の風說を頻りと聞くので、當夜も國民衛兵司令長官ラファイエットに警衛の事を注意した。ラファイエットは一層王宮の守衛を嚴にし、副官から鼠一匹だも逃れ出でないとの報告があつたと市長に告げた。新聞記者のマラアやフレロンも國王逃亡の警告に接したので、フレロンは深更王宮に行つたが、閒として ゐたので滿足して引き揚げた。併し國王逃亡の秘密を知つてゐる人は少なくなかつた。その中にも、王后衣裳部屋の主事は最も委しく王后等當夜の行動を知つてゐた。けれど、この主事の婦人は連累者たる嫌疑を避けんが爲、最も迂回なる方法を以て諸方に警告を與へた。併かもそれは一行がパリの郊外を餘程離れた二十一日の午前二時頃であつた。

玆にマルセールから出て來てパリの下宿に泊つてゐた一旅人があつた。當夜連りと寢室の戸を叩く友人の聲がしたけれど、彼はその儘深い睡を續けてゐると、數刻を經てから、その友人は再度遣つて來て、

とう〳〵旅人を叩き起したのである。訪問者は宮中から國王の逃亡を知らせに來たのであつた。そこで兩人は連れ立つて、警報をマルセール出身の國民議會代議士に齎らし、その代議士は更らにこれをラファイエットに急報した。ラファイエットは取る物も取り敢へず、市長バイイー及び國民議會議長ブーアネー（ナポレオンの皇后ジョセッフインヌの最初の夫）と協議すると、兩人は今となつては國王を捕獲する外、內亂を避ける方法はないと促がした。夫れから、ラファイエットは國王が誘拐された事を宣言し、苟くも善良なる國民は國王を連れ歸る義務ありと勸告する意味の布令を出した。かく國王が自働的に逃亡したのではなく、他から誘拐せられたのであると宣言したのは、激昂し易きフランス人の感情を緩和す可き適當の處置であつた。ラファイエットは國王を追跡すべく追手を四方に遣はしたけれど、何れも見當違でそれ等の追手は空しく歸つて來た。彼の配下の士官ロミューフが東北の途に向つたのは、最早警報に接してから四時間を過ぎた朝の六時であつた。國民議會の追手ベーションは、直ちに國王一行の後を追ふて進んだ。ラファイエットがかゝる危急の場合に臨むで、兎角緩漫なる態度を採つたことは、彼の副將グウヴィオン將軍が衣裳主事から逸早く警報を得たにも拘はらず曖昧の擧動があつたことと對照して、何れも豫じめ秘密を知つてゐたやうにも思はるる。ラファイエットのこの際に處せる態度に就ては、或は國王を逃亡せしめ、これを捕縛して功名を樹てん野心に出でたのだとか、或は國王を逃亡せしむるが、フランスを共和政治に導く最も捷徑であると信じたが爲とか、歷史家の批評は實に區々で、未

だ一定するところがない。

（四）

ルイ十六世がヴァレンヌで捕縛せらるゝに至るまでの行動を敍する前、少しくこの方面の地理に就て語らねばならぬ（地圖參照）。最初國王が逃亡を計畫するに方つて、道順の事にも餘程心を費したのである。ヴァレンヌは郵便道から外れてゐるので、レンスの方向を採ることも考量せられたが、レンスは古來歷代のフランス王がその名高い大伽藍で戴冠式を擧ぐる慣例であるから、ルイ十六世の顏を見知つてゐる者があるだらうと云ふので、結局ヴァレンヌを通つて、モンメディに走ることとなつた次第である。又モンメディに行く最も近い道は、ベルギーに出づる路ほどに近くはないけれど、國境を越ゆるは危險なりとせられ、この議も沙汰止みとなつたのである。パリとヴァレンヌ間の距離は、百四十六哩（モンメディ迄は百七十哩）であるから、早馬にて打てば十三時間で達せらるゝ。ところが國王一行の馬車は一時間七哩半の割合で進んだのだから、國王の方では餘程時間を嚴守しないと、ヴァレンヌ邊りで追付かれる虞れがあつたのである。然るに、ルイはマルン河を越へてシャロン驛に達すれば、ブーエー將軍の手兵が出迎へてゐる譯であるから、最早心配はないと安心したものか、下に述ぶるやうな大變な時間の遲延をしたのである。

無事パリを脱出した國王の一行は、二十一日午前一時半パリ郊外の第一驛なるボンディに達した。御者の側に座して居たフェルサンは此處で馬車から下りて、國王の一行と袂を分ち、北方の路を採つて難なくベルギーに逃れた。フェルサンは國王の一行を最後の驛まで見屆けん爲、本國なる國王グスタープにデンマーク王近衛兵のユニフォーム着用の事を願ひ出でたのだが、ルイは是程の人が扈從するの價値を認めないで、遂に許可しなかつたのである。かくて國王一行の馬車は六月末つ方燬きつけるやうな熱い日に照されつゝ、シャンペーンの大道を砂煙立てゝ驅け去つた。やがてマルン河を渡つて、シャロン驛までは何事もなかつた。國王一行は最早危險區域は通り拔けたと、辛つと安心の胸を撫でた。併し後に知らるゝ如く、大失策はこの時既に行はれて、危險は刻一刻に近づきつゝあつたのである。

ブーエー將軍はフェルサンとの豫ねての約束の如く、シャロンからモンメディに至る沿道の各驛をば夫れ〴〵部下の手兵に命じて警衛せしめた。シャロンから八九哩を隔てたポン・ヅ・ソンム・ヴェルの方面はブーエーの副將ショアジュルの警備區域であつた。ところがサント・ムヌルヅ驛では、ショアジュルの手兵が徘徊するのを見て、住民は不審を懷きて、猝かに騷擾し始めた。彼等はパリから金庫がメッツの兵營に輸送さるるに就き、その警護の爲に出張したのであるとの兵士側の說明に納得しなかつた。實と云ふのは金ではなくして、王后がオーストリヤに逐天するのであらうと推察して、軍隊との間に紛爭を惹起した。ショアジュルはこの狀態を見て狼狽した。彼は國王が午後二時半にサント・ムヌルヅを通

過する、その一時間前先驅の從僕が來るとの固い命令を受けてゐた。然るに、今この人民の不穩なるところに、國王一行が恰度通り合せたならば、それこそ大事を過つであらうと焦慮した。併も三時は來ても、國王もその前觸の者も見へない。ショアジュルは益〻焦躁り出した。彼は自分等が引き揚げたならば、人民の騷動も靜まるであらう、隨つて一行も却つて無事に通過するであらうと合點して、それから少時待つた後に兵士を率ひて大道から傍道に引き揚げて了つた。然のみならず、彼は沿道警護の各驛士官に使を立てゝ國王は、この日多分出發せられなかつただらうと急告した。これが非常の失策であつたことは後で明かにせられた。此の如く、一箇の手違ひは、更らに他の手違ひを惹起して、全部の計畫——多智なるフェルサンが水も漏さず立てたその計畫が悉く齟齬して了つたのだ。

國王一行はボンディに達する前、既に半時間を失つたが、シャロン到着前には四時間の猶豫をしたのである。この時間の違約は、その後王黨の人々に依つて、馬車の修繕の爲であつたと說明せられたけれど、ヴァロリイと呼ぶ馬丁の證明に據れば、その爲には唯だ數分間費やされたに過ぎなかつたとの事である。ところがこの間の秘密は、半世紀を經た後になつて、漸く闡明せられた。ブーエーはこの事をあくまでも秘密に葬り去る積りで、その子息に宣誓までさせて、他言を禁じたのである。小ブーエーもはじめは好く父に向つて立てた誓を守つたが、一八四一年になつて、彼は遂に一友人に往年の秘密を語つた。その話に據れば、ボンディとマルン河との間シャンペーン大道から一寸側道に外れた點にエトージュ

と云ふ處がある。其處に元、宮中に仕へてゐたシャニリイと云ふ人の家があつたので、ルイ十六世の一行はこの家で朝餐の饗應を受けて、思はず時を移したのである。當時この事を知つてゐた者は少なくなかつたけれど、小ブーエーの談話が傳へらるゝまで、一同期せずして他言をしなかつたのである。ルイ十六世は此の如くして自家の大過失の爲、自家の運命を縮めたのである。

ショアジュル等がポン・ヅ・ソンム・ヴェルの地點から引揚げた後、幾干もなくして、國王一行は同驛を障礙なく通過し、次驛なるサント・ムヌルヅで滯りなく馬を取り替へて、次のクレルモン驛に驅けさせた。ところが、ここに從來のフランス革命史家の間に誤り傳へられた極めて興味に富んだ逸話がある。私の最も尊敬してゐた故の箕作元八博士の有名なる『フランス大革命史』（同書第三編第一章（二）參照）にも、矢張り同樣に傳へられてゐる。下文に示す如く、その逸話は、結局有名なるアクトン卿によつて、誤聞だと論證せられたけれど、記述の順序上、茲にそのまま述ぶることにする。

サント・メヌルヅ驛で、不注意なるルイ王は馬車の窓から顏を出して、外を見廻はした。この從僕に扮した、ルイの顏に注意した者の中に、同驛の郵便局長ドルヱがあつた。彼は從僕の顏と、フランス紙幣についてゐたルイ十六世の顏とを見比べて、テッキリ國王の逃亡だと考へ及んだ。そこで町役人が急に召集せられて、ドルヱの說明を聽き、一同贊成して遽かに一行を追跡する事を郵便局長に一任した。ドルヱ（或はドルヱの子息とも云ふ）と他の一人がサント・ムヌルヅからクレルモンに向つて馬を驅ける

中途で郵便脚夫に出會つた。その脚夫の所言に據れば、國王の馬丁がクレルモンで、一行の行先きはヴェルダンではなく、『ヴァレンヌへ』と云ふ一言を漏らしたのである。〔(二)王妃の言參照〕。クレルモンはヴェルダンを經てドイツのフランクフルトに至る道と、ヴァレンヌを經てモンメディに至る路の分岐點である。この言を得たドルエは本道を採らずして、俄かにアルゴンヌ茂林鬱葱たる間道を驅け拔けて、ヴァレンヌへ國王一行よりも先着した。而して驛の町外れを流るゝエーア河の橋に應急堡壘を設つらゆ可く、鐘太鼓を亂打して驛人を召集し、車やその他の障害物を數多橋上に積み重ねた。後年フランス革命の市街戰に名高いバリカードが出來たのだ。一方サント・ムヌルヅでは、果して國王がオーストリヤ軍に投ず可く變裝したのであるか、否かに就いて尙ほ疑念を挿むでゐるところに、國民議會からの追手ベーヨンの使者が早馬打つて同驛に着いたので、はじめて國王一行なることを確めた。(下文(六)參照)。そこで忽ち大騷ぎとなり驛に屯して居たブーエー配下の士官及び兵士は容易に人民の手に捕縛せられた。クレルモンでも均しく、ブーエー配下の騎馬兵が徘徊するので人心不穩の狀態であつたが、國王一行の通過した後、町役人等は早速追手をヴァレンヌの驛人に警告した。國王の一行が事の露現を薄々覺つたのは、漸くこの時であつた。併し彼等は飽くまでもブーエーの護衛兵に信賴し切つてゐたのであるから未だ危險を充分に感知しなかつたのである。

（五）

ルイ十六世の一行は又も代馬のことでヴァレンヌで時間を移した後、エーア河にかゝると、橋上には堡壘が設つらへてあるので通過することが出來ず、旅行券を檢査せらるゝと、前に述べたやうに行先がフランクフルトとしてある。ヴァレンヌは固よりフランクフルトの通路に當つてゐない。一行は乃ち抑留せられて、町役人をしてゐたソースと呼ぶ八百屋の家に送られた。一方、ヴァレンヌの町では、ソレ火事と云ふので太鼓や鐘が鳴り響き、使者は八方に飛んで俄かにその附近にゐた國民衛兵は召集せられた。ソースの家では、國王一行に葡萄酒など響應して、態と時を經たせ、町の人でルイ十六世の面相を知つた者を呼出して鑑定せしめた。このソースと云ふ男も內心勤王家であつたが、ヴァレンヌに於ける王黨の人々は、この時追々驅け付けたショアジュル等ブーエー部下の士官兵卒と共に、武力を以て國王をモンメディまで護送せしめんと企てたけれど、それを未だ決行しない中、熱心なるジャコベンであつたかのドルヱは遲疑して進まざる兵士や町の人々を叱咤して、この企畫を摧いて了つた。國王は事の意外なるに驚き、人民を懷柔す可く主なる人々を抱擁（エンブレース）したりなどして、或は嚇し或は慊したけれど、一向その效がなかつた。左右する中に、ベーヨンとラファイエットの使者ロミューフとは、國民議會と國民衛兵司令長官の命令を帶びてヴァレンヌに到着した。その時は最早明け易き夏の朝の五時であつた。ル

イ十六世の正體はとうとう見露はされて了つた。かうなつては絶體絶命である。この上は時を延ばしてブーエーの援兵の到來を待つのが一縷の望であつた。併しそれも遂に空頼であつた。

ヴァレンヌの町、エーア川を越へた方面には、ブーエー將軍の次男と他の一士官が騎馬兵と共に守衛してゐたのであるが、彼等はサント・ムヌルヅやクレルモン方面の士官、殊に國王の先驅者の到來を信頼してゐたのだから、見張番さへ備へてゐなかつた。併かも前に述べたショアジュールからの使者に接したので、該夜は勿論國王一行は來ないものと承知して、一同假眠を貪ぼり、空しく時を費したのである。かくて、彼等の宿舍から唯だ數百ヤードを隔てた處で、國王は逮捕せられたことを彼等は豫じめ知らなかつた。彼等はその凶報を得ると、急遽ブーエー將軍の鶴首して待つてゐるステネーに驅け去つたステネーはヴァレンヌから二十哩隔つてゐる。ルイ十六世の消息を待ち焦れてゐたブーエーはヴァレンヌ事變の注進に接して驚愕した。そこで俄かに喇叭を鳴らしてドイツ雇兵を召集したけれど、その聯隊長が二心を抱いてゐたので、徒らに時を失つた。今は最早萬事休すと斷念して、ブーエーは豫ねて貯蓄したる金錢を部下の兵士等に分配して、ルイ十六世の囚人同樣の境界に在るを救出さん爲、企畫するところあつた次第を逐一告白した。彼がエーア河流域の低地を瞰視する高丘に達した時は、最早二十二日の午前九時過ぎであつた。騎馬は凡べて疲れ果て、エーアの橋は梗塞せられ、渡渉する場處は知られてゐなかつた。昨夜は熱鬧の巷であつたヴァレンヌも、今は靜まり返つて居る。國王は既にパリに向つて

數哩去つた後であつた。彼は惆悵として、遂に身をオーストリヤ軍に投じた。ブーエーはその後亡命貴族等の間に信用せられず、イギリスに亡命した。國王が既記の如く、彼を深く信任したにも拘はらず、彼の部下の失策と國王自身の過誤とに依つて、大事は遂に破るゝに至つたのである。併し此の如き手違いがなかつたとしても、ブーエーの軍隊内にも豫想に反して革命思想鬱勃し、兵士の風紀も頽廢してゐたのであつたから、國王は結局豫定の計畫に隨つて、モンメディからパリに攻返ることは不可能で、矢張りレオポルド皇帝の懷ろに投ずるの外、王政を回復するの途はなかつたのである。

（六）

此の如くしてルイが、待焦れて居たブーエーはとうとう來なかつた。ロミューフ等が畏まつて國民議會の命令書を示すと、ルイは苦が〳〵しげに『佛蘭西には最早國王はないのだ』と答へた。實際フランスの王政はヴァレンヌで滅びたのである。一年後に於ける悲劇は、單にその王政の死體を葬つたまでのことである。國王一行はパリ還幸に四日を費した。浴道の驛々では幾千百と云ふ群衆が始終王駕の前後に付き纏つた。中には憐愍の情を以て迎へた朴實な農夫もあつたが、徒らに事を好む暴漢が多かつた。是等の暴漢は、口を極めて囂々と一行を罵り狂つた。わけて王后に對しては最も穢ない言を放つた。シャロンでは暴漢等の怒罵が最も痛烈であつたが、中には『ルイとアントアネットの心臓や肝臓を料理して

いたい』とさへ息卷いた。ショアリイと云ふ處では國王の顏に唾した不敬漢があつたが、王后や王姉が痛憤の涙を流したに引き換へて、ルイは些かも色を動かさなかつた。この悼ましい旅行の半途頃で、國民議會の代表者三人が出迎へた。國王は是等三人に向つて、國外に逃走する積りは毛頭なく、單にモンメディに留まつて憲法の修正を遂げる目的であつたと陳辯した。三代表者の一人バアナアヴはこの時國王と同車してから、その後痛く王政論者と豹變したのであるが、『國王の是等の言葉で、吾々は王政を救ふことが出來るであらう』と云つた。やがてボンディの森に差しかゝると、パリの破落戸から成る一隊の暴徒が國王一行を襲擊したけれど、それは辛うじて護衛兵に依つて擊破することを得た。パリの狹い街道は危險であると云ふので、ラファイエットの指圖でシャンゼリゼーを迂回することになつた。豫めその筋の命令によつて、パリの人民は敬禮もせず罵聲も放たず、前驅の騎兵が『默れ！〳〵』と叫まゝに、唯だじつと目送するばかりであつた。一行がいよ〳〵チュイレリイ宮に歸着したときにも、護ぶ衛ヂューマ將軍と、王宮に侵入せむとする暴徒との間に格鬪があつたが、幸に血を流すまでに至らなかつた。この一種葬式にも似たる光景の前日、プロシヤ公使は本國政府に報告して、國王の生命は多分政略上から助けらるゝであらうが、王后の生命は到底助かるまいと云つてゐる。以て王后の如何に不評判であつたかゞ察せらるゝが、彼女は四日の旅の間に頭髮が白くなつたと傳へられてゐる。

この悲劇の敵役たるドルヱは、國王一行の後に隨つて、得意滿面パリにやつて來た。彼は當時に於け

る一種のヒーローであつた。彼はその後國民議會に向つて、曾てパリで王妃を見た事があつた。國王の顏はアッシイニア（革命當時の不換紙幣）について居る肖像と同樣であつたから、サント・ムヌルヅでテッキリ國王の逃亡であると思ひ付いたのであつたと、自分の利益になる陳述をした。然し後年になつて彼は直接責任を負ふ證言を一切否認して、決して自身の思付或は推量からではなく、シャロンから（前文（四）參照）得たる命令に從つて王駕をサント・ムヌルヅから追跡したのであると述べた。彼がこの後の方の陳述をしたときは、恰もオーストリヤ軍に捕虜となつてゐた際で、訊問者はかのフェルサンであつた。ドルヱの如き物に動ぜぬ男でも、囚れの身では心にもなき陳述をするであらうと云ふので、フェルサンの訊問書の事は眞實とせられないで、ドルヱを英雄とする俗說の方が從來の歷史に傳つてゐたのである。然し前に述べたラファイエットの派遣したロミューフは明白にサント・ムヌルヅの郵便局長はベーションが遣はした使者に依つて警告を得た事を斷言してゐる。このロミューフの證言は國民議會の調書中に含まれて今尙ほ大切に保存せられイギリスの歷史家アクトン卿は親しくこれを目擊したと云つて居る。當時のモニツール新聞がこのロミューフの證言を揭載しなかつたのは、ドルヱを英雄にしたる俗話を抹殺するも心なき業と思つたからの事であらう。ドルヱは前記の功勳に依つて國民議會から千二百磅の賞金を穫、彼はその翌年國民協議會の議員に擧げられた。彼のその後の生涯は、實に幾多の波瀾に富んでゐるけれども、本文と關係がないから茲には割愛する。

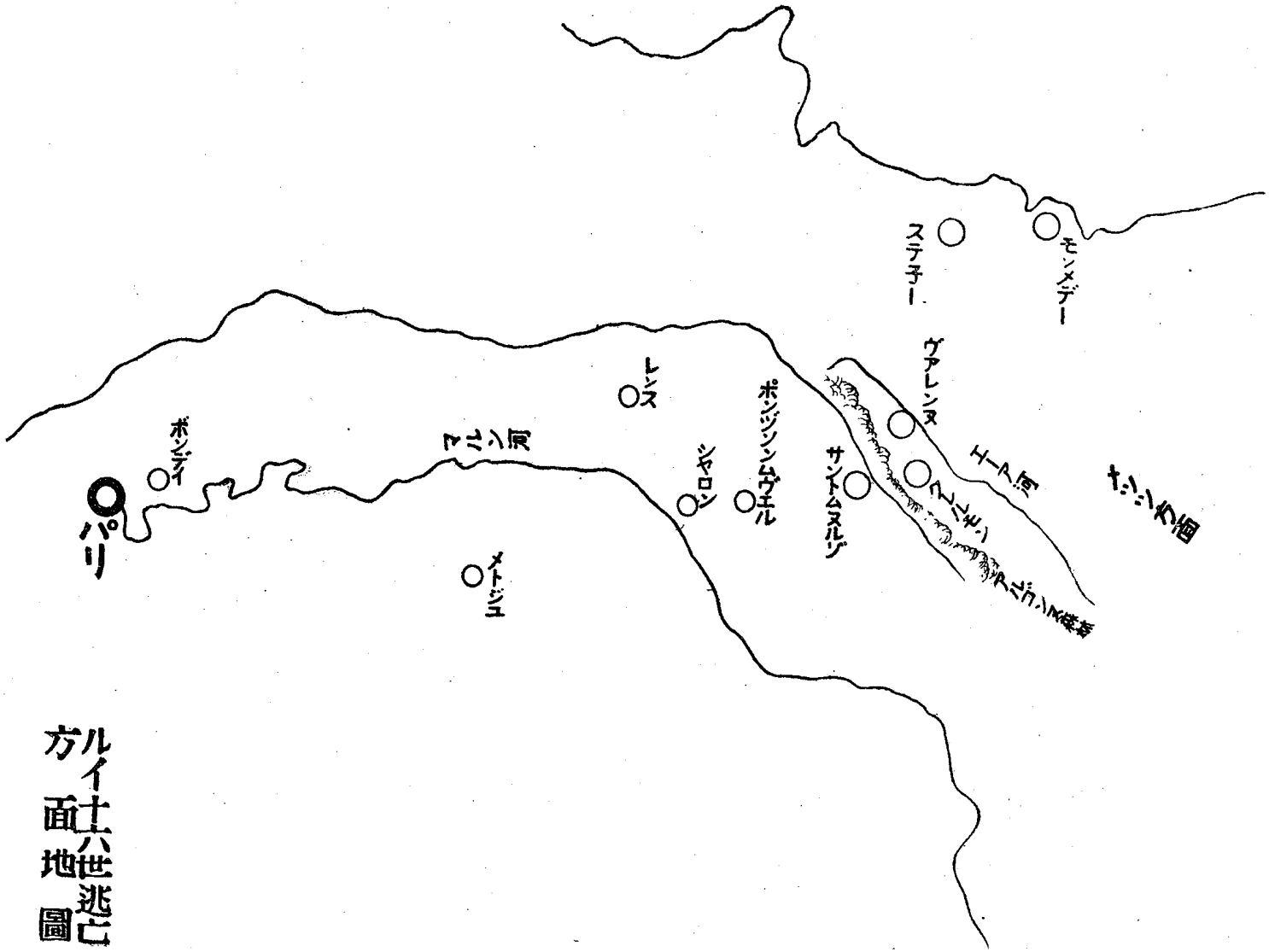
（七）

ルイ十六世はパリ還幸後一時王權を停止せられたけれど、間もなく位に復したのである。ところが、その後革命の形勢は急激の變化を遂げたので、彼は結局フランスに對する叛逆人とせられ、翌々年春遂に『革命廣場』でギョッチンヌの鬼となつたことは、歴史を讀む者の普ねく知る通りであるが、その間に於ける彼の慘命は實に酸鼻を極めてゐる。彼は敬虔にして神を畏れ、寛厚にして民を慈み、君王たる二大資格を具へてゐたのであるが、惜い哉、意思薄弱にして優柔不斷、併かも大勢を洞察するの明を欠き、幾度か革命を適當の程度に制遏するの機會を逸して、失敗に失敗を重ねたる中にも、このヴァレンヌ逃亡の失敗はその最大失策であつたのである。この企畫のフランス人――その大多數は衷心尊王心の篤きフランス人をして、ルイ王は遂に國民を裏切つて外敵を誘致し、革命の效果を滅却せしめんとの異圖をたくらむ者だと猜疑せしめ、革命をして益〻過激ならしめたのである。余は即ちアクトン卿の『モンメディの遠征は即ち内亂と外寇の第一着歩であつた。この事はドルヱ等が逃亡者を逮捕したる際、茫漠ながら理解してゐたところであつた』との批評を引いて結言にしやうと思ふ。

余は『佛蘭西革命史論』を起稿するに方つて、革命史上の重要事件だけなりと、多少突きこんだ研究をしたいものと志したが、本編はその僅かある中の一つを、補修したものに過ぎない。主として

參考したのは、アクトン卿の『フランス革命史講義』（Lectures on the French Revolution）である。その他オーラール、マデラン、最近革命研究者として最も名高いマチエ、イギリスではホルランド・ローズ、ドイツでは『ウェベル世界大歴史』夫れから、『ケンブリッヂ近世史』叢書中のフランス革命の部等を參考した。（完）

占部百太郎



ルイ十六世逃亡方面地圖